

ドイツ・ロマン主義から北欧ロマン主義へ
——H.ステフェンス「コペンハーゲン講義」の思想的前提をめぐって
中河 豊 (名古屋芸術大学)

はじめに

H.ステフェンス(Henrik Steffens)の「コペンハーゲン講義」(1802/1803)はドイツ・ロマン主義を北欧へ導入する試みであった。「コペンハーゲン講義」の直接的思想的前提は、シェリングの自然哲学と F.シュレーゲルのロマン主義である(ステフェンスは初期ロマン主義が開花したドイツのイェーナに行き、シェリングやシュレーゲル兄弟たちに接した)。

本発表は、この思想的関係をヤコービの『スピノザの学説について』(1785年)以降、より限定すればフィヒテの『全知識学の基礎』(1794年)以降のドイツにおけるスピノザ哲学受容というコンテクストにおいて考察する。

シェリングとヘルダーリンはテュービンゲン・シュティフト時代にヤコービの『スピノザの学説について』(初版1785年)を読んだ。1991年2月12日、彼らの共通の友人ヘーゲルは、ヘルダーリンの『記念帖』に「一にして全」という同書にあるレッシングの言葉を記入した。ヘルダーリンは「一にして全」を理論的に展開する合一哲学を構想する。

シェリングは、1995年1月16日付ヘーゲル宛書簡で「スピノザ風の倫理学」を書いていると報告し、1995年2月4日付ヘーゲル宛書簡において「私はスピノザ主義者になった」と告白する。彼の『哲学の原理としての自我』(1795)におけるスピノザ主義は、フィヒテ的な絶対的自我を基礎とした。

フィヒテは『全知識学の基礎』においてスピノザ主義が「非我」を「万物の实在根拠」とする宿命論であるとした。これにならって、シェリングはスピノザの哲学が「非我」を「自我」に高めた「完成した独断主義」であると指摘する。ところが、フィヒテ/シェリング的絶対的自我は自然概念の位置づけを困難とする。スピノザにとっては能産的自然こそが問題であったはずである。シェリングの自然哲学の構想は、この困難を解決する試みであった。

シェリングは『知識学の解明のために』(1796/1797)で有機体の「能産的力」に注目し、『自然哲学の理念への序論』(1797)において「生きた有機体」の中に「秩序づけ包括する精神」の支配を確認する。自然は精神の法則を表現し実現する。こうして、自然は「可視的精神」であり、精神は「不可視的自然」とされる。

自然科学(鉱物学)者ステフェンスは、『スピノザの学説について』からスピノザの哲学に関心を抱き、スピノザの著作を読んだ。そして、ドイツのイェーナにおいてシェリングの自然哲学を受容する。ステフェンスは、シェリングにならって「予感」を手がかりにし、自然及び歴史と人間との合一を構想する。彼なりの「一にして全」の理論化である。